

孝山記後

十九

函番號	21	號
種別	國	
種別	32.14	號
月入	月	日

919.5
338
Vol. 19



常山紀談卷之十九目次

一 細川忠興ホソカワタカユキ曾ソノの立物タテモノ化カ説セツ

一 忠興タカユキ飯イヒガ河カ豊フネ前マヘ同ドウ肥ヒ後ゴ父子フシを誅ツせしむ事コト并ナド肥ヒ後ゴが妻メを即ツ

義ギ小コ死シ事コト

一 黒田クロダ滿マン德トク丸マル袴ハカマ着キの時トキ母モ里リ但ツ馬ウマ舞マヒをシ事コト

一 龜田カメダ大オホ隅スミ江エ戸ド北キタ石イシ壁カキをシ築キツき事コト

一 吉岡ヨシノカ建ケン法ポフ狼ウルフ藉セキ太タ田ダ忠チュウ兵ヘイ衛エイ手テ柄カ并ナド太タ田ダ武ブ技ギをシ論ロンず事コト

一 柳ヤナギ生シ宗ムネ矩ノリ劍ケン術ジュツ御ミ師シ範ハンの事コト并ナド宗ムネ矩ノリ先マキ見ミの事コト

一 板イタ倉クラ重シゲ昌マサ肥ヒ前マヘ國クニ鴻トウ原ハラ北キタ賊マダウ追オヒ討ツれ事コト并ナド周スウ防ボウ守シュ重シゲ宗ムネ先マキ見ミの事コト

一 川カハ北キタ九ク大ダイ夫フ肥ヒ後ゴ國クニ川カハ尻シをシ守メる事コト

一 天テン草ソウのノ一イチ揆ケイ夜ヤ討ツれ事コト

- 一 鍋島榊原鳴原城先登の事
- 一 黒田勢天草丸を攻破の事 并 黒田睡鴻武畧の事
- 一 水野勝重父子有馬永純本丸一番身あを論せし事
- 一 陣佐右多の一揆の長四郎が首を取る事
- 一 松野亀右多の鉄炮修煉の事 附 松野才覚の事
- 一 藤堂高虎阿濃津より勢揃せし事
- 一 福島正則領國を召放し始末の事

常山紀談卷之十九

備前國 湯浅新兵衛元楨輯録

○細川忠興よ曹の物まじをいふせはうといの方のありし詳し
 事多しししし使のあへらまきり使立物の下地相れ本とあき
 らしハ折やまきりのおきいさゆらんといハ忠興色をまじ
 汝ハ弓箭取の使とも受ぬあり軍は修む者難う生て海人
 ととよぶまじこちあは命とよまのり何条立物の折るを厭ふま
 かりたをよまま立物のおるむくりは働たて六何のこころ
 き事あへんひと面目うてこそあまといをまじり

天正元癸酉年七月信長徳の城を攻落されし不岩成主税助
 を細川藤高の士下津控内打取し時忠興八つの年を

長岡監物が肩のりく監物が立物鹿の角小をつき見物して

奥入りくく人を見え後年の生きたをむくくりくく

○細川忠興豊前より同州竜王の城に飯河豊前宗祐禄三千

石岩石の城に長岡肥後宗信禄六千石宗祐の子寵せく

長岡の姓を与へらまり小父子も罪有く其長十年七月廿一

日入しも誅せける宗祐河北石見逸見治左衛門を討ちし宗

信八増田藏人を討ちしせける宗祐散々小戦ひく死傷多し宗

信が妻八木田助右衛門是政が女あり宗信と睦しうくて對面せける

事三年よ及びり忠興是政が後室の尼雲仙院といへるをよび

て豊前肥後罪有く誅せしめども汝が女と孫の女も罪なり

密に告知せく命を助けよとあり後室の尼すく肥後が妻常

小中より然も夫をすてかざる時よれがまんよ八得を

存まられど仰の奉りまを告やさんく文く告やりけ

ま誠を仰ハ奉りま今ハのまハ夫をすて道まん事

人道ありて女子ハ東西を日記まへむる老ありまバ養育し

のましとく使まつけく尼のりく送りくを宗信是をすて大い悔

と我過を謝し終ふ共よ自害ししりり

○黒田長政の嫡子満徳丸とく四の歳袴着の祝ひの母里但馬ハ

ひき目親よく常よぢいとあつまり其時但馬満徳丸の髪を

かきかたてく成長し功名し父上ありよく

長政何といふのそや我武畧をさみきり若き時ハ汝ヲ備後

山栗も相謀りき朝鮮よとく又関ヶ原の合戦も皆汝が扶

小あゝ大敵は勝つゝ其後世太平あるまじき武功なり！
満徳いふはわりのあつても我を越す事存もこのべとて膝立直し但馬
をわくまゝしつゝ人々汗を流さざるは但馬かゝるよ向ひく
故あき怒りぬ人の子に功名し多くと云ハひが事うとく物もせ
ざる体ゆく長政此方をも向もせは長政いや父よりまのつれとハ
いふと怒らまゝつゝ但馬赤くし心を静めくすも武功幾
度事よあひても仕まゝしつゝいと思ふ事かたく度ごとく不足
ある者よん他人ハきまひあると褒めらるゝも黙して居るよ
よた軍兵を引具し地の利よく幸又勝つゝと自讃ハ以の外
のひが事よてゝゝ今テまで勝軍おなまゝて毎度斯のめくち
らんとなつゝ必敗北あべし味方崩さるゝ時一足も引か付死

ハ殿の得り此なり其ハ大将の道よゆべし味方を討せは軍
よ勝を良将しつゝハ殿の武畧進む一途ハ得とのめくちをせぬ
進退國の中の一途ハかけくちをゆゝハ此是非の論ハ備後老
功の老あゝの同時とをいせり満徳との只一人かけ出て討死
する事ハ葉武者の業なり死ぬやく小軍は猶を大将のまじ
よハゆゝ事よん此詞よく覺えくゝとくよハ能くもへと髪を
かゝり長政の怒をおも思ひぬるゝきたり備後守次の間
小酒宴して有しつゝつけて銚子かちつけ取拵く走り出長
政の前は跪き倅も顧みずすめなりゆとく盃をたぐ若死
時如水公の小姓つゝつゝ御酌ハいゝあゝひし小笠原の礼
義存ゆゝつゝ酒をすゝめくまじ長政うちつけ盃をめぐ

おけらまうしるべきを但馬は賜はりゆへとて氣ちがひよそれ
罷出よしといひるまじバ但馬すくみより其盃を戴きて三度
うけ飲て後殿ハよあたは怒り多し今日の祝ひは興さめ
ハ少一酔も入といひしる長政も又盃は十分引受られた時
但馬の者よとて田村をうらみわし舞さまうしる鬼の
如くたる男は替古せしる拍子も耳目を驚かせり皆二回
兵のまじりしるさるさる酒宴盛ななりけれバ備後守高
小若き人々能事まじり心掛の深たも殿又思慮もたも殿あり
大しうけハ但馬又事ありきハ但馬なり思田の家ハ武勇
目出度時よとてまじり酒を酌りしる事有ん時鎗を合せ
たはむ事ありしるハ何事もゆきしるぞ人さうしるや

舞やとて酒宴まじり又長政或年の春歳初の祝は栗山
備後がめし行まじり酒宴あり四比よ及ん長政られ
居しハ若き者も酒ありしる得飲しあしりておとけ
酒ありせよとて歸らまじり但馬今か居く若たのたよ
懇よ詞をうけ人々悦ぶしる有しるまじりかく我まの
述ぬ殿なり頂よ大なる灸をしるしるさるなりと大音
ゆき云しと長政ゆぬ休しる歸りしるなり

○江戸の石壁をまじりしる時浅野長晟仰を奉りしる亀田大隅
高綱を奉行しる石壁成る後山事三度よ及べり
△徳院殿おしり御覽しり何とて崩さしりやと仰有しる
△謹で其事よ大隅軍の時鷗北嘴の鎗を授け先りけし

陣つひに崩る事ハなしく石ハ無心カのゆくせんく
此と申事終りく鹿毛ぶちの馬を大隅に廻ひりし士
二毛の馬に乗こりやいゆげ事もあるは口惜くは
と土井利勝ヤ上らまうべ別の馬を換て與へよと仰らまけ
と亀田大剛の者ゆく十文字に鎗下坂忠親が造ゆくさやハ
鷗の鬚よ造り栗色よぬり總螺鈿の柄なり

○慶長年中禁裡に散樂の有し時貴賤群衆しり吉岡建
法とりぬ漆物屋劍術に妙手ゆく有しが無礼の事有しを
雑色咎めくまへ建法外に出羽織の下に脇差をかくか
の所に入先此雑色をきく一打に切く夫より縦横よかけ
あつりゆくあくまてきくたのりも負数をきく板

倉伊賀守勝重日の御門より一眉尖刀の鞘をさぐり向ハ
まうを太田忠兵衛何条におろせめあやあるとしてけ
れを勝重此長刀ゆくゆくゆへらまうく太田吉岡は向ひ
悪逆無礼のなを首をのべよとまてられバ吉岡ハ紫宸殿
の階に息つき居しが我ハ太刀打せん若汝ならんハとひひく
階を下りて立向ふ太田已み眉尖刀ハ無益なりといふ
刀をぬく吉岡走りかくりさあは倒れり太田大音は倒れ
しを切ハ士の恥なり立て勝負せよといふ吉岡立あくるを
飛り一太刀に切殺し勝重悦びく太田小祿を増し盃
をゆへく後吉岡が倒れしを切するハ勇気有りといへど
と氣は驕の失ゆる似り吉岡商賈賤しき身なれども

劍術ハいさあ人も及びく倒さるハ天の興へなり
を切らざるハ虚を打の理よく倒さるもいさあやと云ふ
太田仰誠又辱くハ一ツ存る故の人多く敵の倒るるを
おろも立どおんとするを不身を忘れ脚を切らる倒る
者勝なりハ倒るは虚実の二ツを吉岡が倒るハ
虚よりハ吉岡よりハ実より倒るもきやさく斬る男
あは倒るハ身を防く事虚に似てはとも近付あは
切んと存るハ実よりハ虚も実も倒るゆりの立あは
ぬといふハたのく其立あはる時ハ躬を防ぎ敵をきり
ちるもんと存る心虚よりハそのを打てきやすく切ら
ゆハ誠よりハ小業匹夫の事あは殿のちるゆりの理

ていもまどされども陣をこも軍する道あを相うたひ
事りやと憚を省むくハヤアてんとハバ勝重大お感せ

○柳生但馬守宗矩ハ大和國あは世々柳生の庄此地頭あり
関ヶ原の戦後徳川家仕へなり父より劍術を受傳へ
双の妙手と号せたり大猷院殿御年ころよりあり
此技を好ませるハ宗矩御師範よりあり御心を盡させ
頗其妙を得させり只此藝小あり其人を信て敬
せさせり人々もひたり小実ハ其技よあつて治平の政
事を喻しヤるるも常ハ御側の人々ハ天下の治めハ但馬
守ハ學びてこそ其大體を得てこそ仰られしとぞいふる

宗矩年老病重カネノリトシオイヤヒニシテりり一日も辱カチケくも家イヘに入イラせむいきて正保三
年三月終ツヒに空クナしくななりきふ其コノ後ノチもあまき贈位ソウイの
事を執シり仰セられ従四位下ジツシキノノゲに降ノげさせむありや宗矩死シせし
後事ノチノコトのあまき生キく世ヨにあまき尋問タネトクべきものをもと深く志シ
せ仰セらるるハ誠マコトに有リぐさ事コトなりし其中ナラ一事相傳ヒトツタふハ
鳩原凶徒トビハラキムウトの乱ヲ江戸エドにゆきし頃コトハ十一月十日之宗矩有馬玄蕃
頭カミトヨウヂ豊氏トヨウヂの家イヘに散樂サシバク有リく行向イキムカひし家隸ケライ多タク但馬タマを
呼出ヨビイダし肥前國ヒゼン鳩原トビハラに土民相集ドミンアヒミツりし楯籠タテコモりしはぬ是切支
丹宗門ニツクラの者モノ少シく松倉マツクラよそむしむしめての事コトなりし早馬ハヤウマ来キり
板倉内膳正イタクラナニシ追討ツイツクの御使ミツカヒを承ウケりしは法護ハツカウ向ムカひしとぞやける
宗矩カネノリさしぬ体タイあまきあまきのあまき歸カヘりし用人ヨウニンよ向ムカひ急イキく

宿所シヨクショに歸カヘるべき事コトあまきぬよた御馬ミツバをかりし人ヒトといふ心得ココロエ
アとぞ馬ウマ小鞍コウカキ置キく率ヒキしし宗矩カネノリおまき品川シナガハよせ付板倉
ハ如何イカニも問トハ遥ハルカなる事コトせしりしと答カふ川崎カハサキに池ウヅキ多タく問トハ今イマハ
二三里ニサンリも隔ヘガりしりし日ヒ已スに暮シる及ツバ引返ヒツカハし御城ミツシロ小
あぐり近待キンマシの人ヒトを以モてすべき旨ツキあまき伺候シコウしはぬとせは
やぞ御前ミマエよ召メく何事ナニコトあやと仰有セ宗矩畏カシり只今スレイマ兼カりしハ
九州クウシュウよ切支丹キリシタン宗門シウモンの逆徒ギャクト發起オコシし内膳ナイニシ重昌シウチャウ追討ツイツクの御使ミツカヒを
兼カりしをせ向ムカひし仰セと称イハしはむしむべきと存追ゾウくゆへも
追オつたは此ココよアさん為タメなりし何故ナニユエよおとめんとハ
アとぞ御尋ミタマシありさん君キミハひしすの土民ドミンたらく立タテつたり
ゆと召メく追討ツイツクの御使ミツカヒかりしとせし宗門シウモンよ付ツキく起オキる軍イクサハ

大事ダイジのゆゑに重昌シゲチカ一定討死仕シべしといふもさういふも
めむやと存ゾクひりしに以モテの外御氣色損ケキキツクト御座ゴザを立タせ
る宗矩ムネノリ夜ヨあつるまでも退出タシツクせむ此コトより宗召ムネノリ又御前ゴゼンより召シ
く重昌シゲチカ討死ウチシすべき子細シサイいづく御尋ミタヅメあり宗矩ムネノリさればこそ
兵ヘイの道ミチハ勇ユウを先サキとて勇士ユウシハ死シを悲カナシに三軍サンクンを恐オソましむるも
ハ今イマの名將メイシャウ此專一ゼンイチとする事コトもてんは凡愚ボンクの輩トモガ宗門シウモンを海ウカ
信シト其法ミツホウをかきくちりく死シを以モテ身ミ此悦ヨロコビとて百千ヒャクセンの人死シ
を恐オソまするの勇士ユウシとありは事コトハ宗門シウモンのあつてこそいへ織田家オダノケ
の武威ブキを以モテ一向門徒イツカウモント勝事カタク能アタは天子テンシの命メイを假カリく和平ワヘイ
よありらひぬ三河國ミカハの一揆イツキも近チカき御家ミヤ此事コトもてこそいへ大坂オサカ
此時ココトキ重昌シゲチカ年トシこくりりてとも数ス十万人マンニヤクは撰シラばも唯タビ一人ヒト大事ダイジの御ミ

使シ兼ニりし者モノあまは是コレ等の士民シミン打亡ウチコロスすべきは何事ナニコト有アルべし
難カタく其下知シカダチを宵ヨムくべしと思召オモシしんハ事の違チガひをそしめ
重昌シゲチカ位イ高く禄ロクも有アリく年頃トシゴロ重オモき職シヨクを司シつて常ツネよ人の敬ウヤひ
いんよ大志ダイシすべき今イマの重昌シゲチカが身ミめく城シロを攻ウツめひあんな西國サイコク
の諸侯シヨウコウいづくハ下知シカダチに従シふべきありのゆゑに似ニて攻ウツめんとていひ
なんよ又御一門ゴイチモンの人ヒトとてさのゆゑに宿老シュクロウの内重ウチオモのゆく追討オイツクの
御使ミツカヒ下シさすべしとてあつて重昌シゲチカ何ナニの面目メンモクありて生ナて再び
関東セトウよあつるべきといふ人を土人ドビレヒラ等トウふ打ウせらひかなん事コト誠マコトホ口
惜オシくこそいへ是コレハ御家ミヤの恥辱チジヨクともいへべきをや御もつてを蒙オモり
ていづく追付オツケありてとてかく押オサへとめく具グして歸カヘるべき物を
と憚ハムカるあつてこそいへば御後悔ミコトシライの色イロあつてこそいへ

そ事も叶ひづるや思ひ召らん夜も更けりて入せり
しがバ宗矩も退出しひそかに人ふかくと語りたりとや誠
宗矩が計り事掌をさしづるなりと云く尤深討遠慮
ありとぞやべき

○鴻原ゆく寛永十四年切支丹一揆の時討手石川主殿頭忠
綱板倉内膳正重昌なりと云く石川ゆく我年老り
板倉其器又當りといひましが重昌仰を奉り肥前
趣き城落さるるバ又討手の大将を下さるるを石川
ゆて戦始ハ其撰よありん事をさめ悦ばざりた今思ふ養
の世は徒に死んも志よ非どあをれ仰を奉りて西國に趣
やとぞいもまじる重昌筑紫よ向ふ耐京都もて所司代板倉

周防守重宗よ對面ありて今度の仰を承る事辱まじ申を
らまじり重昌既よ京都を立ち後重宗重昌がわりあを察
さすふ必討死さるる再令をまてなりといひまじり松平
伊豆守信綱肥前よ進茂せしむるゆり重昌城を攻て討死
せしむる人重宗よ其いれをとり重宗城ふこもる老
百姓の身ある故に内膳正忽攻落さるると思へるもあ
まじりきとひ此城を攻落せしむ一揆の奴原さめ功
名ともいれり只今四方無事の時一揆をたぬた城ふ
籠りて降参すも悉く殺さるる人事を知り其心
一和さるるもやとる落るる日数をゆるバ又他の大将を
指向らまじり内膳何ぞ生てぬべき吾是を以て討死せ

人事を知ぬといふらんや

○細川忠利ホリカハタカトシの士川北カキタ九大夫カキタといふ者あり川尻カシリの代官ダイカンを勤めよと
なりし出陣シラゲの時供トモよ連らまざるば代官ダイカンの職シヨクつゝむべしといひ
くまば尤モトモくそ出陣シラゲの時供トモよと定めしる天草アマクサハやもす
まは一揆イチギをあらんと西國サイコクの人北キタのひさる事あらば心あけ
川尻カシリハ海を船フネの着ツく知チり細川家ホシカハケの采藏サイザウあり天草アマクサ海上
七里セリとゆ川北カキタ兼カミく地鉄炮ヂテウポウの数を志チすべしをり
草クサの一揆イチギとゆ川尻カシリの海岸カイガンよ一間イツケンよ一本イツポンづ竹タケをまきせ
一本イツポンづ火繩ヒナヒをゆひ付ツケ五本イツゴホンよ一人イツヒトの地鉄炮ヂテウポウを配ツケり後小
天草アマクサゆく生イケごまらる老オシのいひるハ其夜カシリ川尻カシリの采サイを取トル
為タメに船フネをわしり川尻カシリよいづもあき鉄炮テウポウを備ツク

見えたる故ユヅリに熊本クモトより軍兵イクシヤウのち川尻カシリ小来コキまら
船フネをわしり川北カキタなりせば川尻カシリの采サイを取トル
天草アマクサの城シロを破ヤブり川北カキタが謀カガり天草アマクサ
の糧シヤクを奪ウバり

○天草アマクサの一揆イチギを圍カケり攻ツクりしに城中シロノナカ糧米シヤクマイ既スデに乏トボしくなれば
夜討ヨクダし米コメをとんと本田ホンダ但馬タマが謀カガり先マツ練レン早口ハヤクチの堀ウチの
外ソトに水ミヅを汲クミせし時鉄炮テウポウをあらはせしりかくす
事コト三度サンタクよ及ヒ後ノチよ八漸ヤウケンよ遅オソクく夜ヨよ入イり汲クミせしり是コレハ夜ヨ
討ダクし時の鉄炮テウポウ火ヒを見咎ミヤめしせしり其ソノ後ノチ毎夜マイヨ
堀裏ウラゆく切支丹キリシタン此ココも天テン帝テイといふを数千人スチヤク一同イツドウ小
をめぐりし物音モノネをまきしり八ヤチさんサンの謀カガり

かく寛永十五年二月廿一日の夜五百人をのりて黒田忠之の陣所よりのせ二陣の兵二千人を二手よ分ち繩をひきこめて額よハくすすを鉢巻よりく相辞ハ九ク九と定め首をとりそ食物をとり来るを第一の功名おせんとな知し諫早口よりゆく出郭のかくある有江口へ退入しと定め陣屋を焼ん為小槍の木を削りけりしと腰よさすせ丑の刻より月もあざらふくししを便し黒田の陣所よ押す時小関の声をあぶきバ城中も関のあしをとりし士大将黒田監物志よりきくはありしと父子ともは面もあはれ支へ戦ひしが流し矢お中より討死ししは従兵四十三人枕を並べ討まらり一揆大勇進ししも黒田美作入道睦鷗物しと柵壊きり

の守りかきききあらふ中に黒田市正高政鎗を掲げあひ三人突伏せ小姓よ首をとり市正より一足も引なまきさるるまは軍神も照覽あし斬り捨るごと呼はるるを一揆せ爰ハ破りしとて寺澤兵庫頭忠高の陣所よ進み三宅藤右進支へ我は痛も負しり一揆又鍋島勝重の陣所は井樓小火をかけしりし松平信綱より夜廻りの士岩上覚之次尼子八郎吾術紀州の使者山中作右衛門と打連て来りし山中ハ銀の曹より十文字に鎗をたさんしと相戦ふ鍋島の軍兵馳集り入ると防ぎきりし竹把し火の付く付く白日のみく一揆かたをとりし時四郎矢倉よ有て勝関をつとせしりし城中静まりたり其後水野日向守勝成鷗

原^{ハラ}よ忌^{イミ}陣^{ジン}一^{ヒト}黒^{クロ}田^タ睦^{ムツ}鷗^ウよ夜^ヨ討^{ウチ}の有^{アリ}様^{サマ}か^らく^くせ^せゆ^ゆく^くひ^ひり^りより
四^シ方^{ハウ}を固^{カタ}く取^{トル}ま^らる^るも^も竹^{タケ}把^{ヅバ}を付^{ツケ}柵^{サク}の木^キ二^ニ重^{ジュウ}三^{サン}重^{ジュウ}よゆ^ゆひ^ひる^る者^{モノ}手^テ
の陣^{ジン}よ討^{ウチ}く^くゆ^ゆる^る事^{コト}を聞^キけ^け古^コ今^{イマ}無^ム双^{ジュウ}の武^ブ器^キを^をく^くる^る一^{ヒト}揆^ケく
さ^さま^まも^も一^{ヒト}揆^ケを^を一^{ヒト}名^ナ超^{コエ}て^ても^もく^くら^らん^んハ^ハ日^ヒが^が士^シ卒^{ソツ}なり^りと^と云^{イハ}ふ^ふこ^こり
○同^{ドウ}ド^ド城^{シロ}攻^クめ^め鍋^{ナベ}嶋^{ジマ}の志^シより^り堀^{ホリ}二^ニ三^{サン}間^{カン}を^をり^りふ^ふ竹^{タケ}把^{ヅバ}を付^{ツケ}ま^ませ^せ軍
兵^{ヘイ}ひ^ひと^と押^{オシ}寄^{ヨセ}居^イる^るふ^ふ城^{シロ}中^{チュウ}殊^{コト}の外^ノよ^よ静^{シヅ}か^かま^まと^とバ^バひ^ひを^をら^らふ^ふ堀^{ホリ}の
内^{ウチ}を^をさ^さの^のを^を見^ミる^るふ^ふ一^{ヒト}揆^ケ一^{ヒト}人^{ヒト}も^もな^なし^し士^シ大^{ダイ}将^{シャウ}鍋^{ナベ}嶋^{ジマ}安^{アン}藝^{エイ}是^シを
聞^キ堀^{ホリ}裏^{ウラ}を^を行^{ユク}く^くの^のを^をく^く其^{アリ}有^チ様^{サマ}只^タ今^{イマ}攻^ク入^ルべき^きく^くも^もな^なり^りく^く
あ^あら^らと^と云^{イフ}程^{ホド}こ^この^のあ^あま^ま我^ガ先^{サキ}よ^よと^とか^かけ^け集^{ツク}る^る鍋^{ナベ}嶋^{ジマ}の陣^{ジン}ふ^ふ附^{ツケ}ら
ま^まし^し神^{カミ}原^{ハラ}飛^ヒ弾^{ダン}守^シの^のさ^さも^も竹^{タケ}把^{ヅバ}を付^{ツケ}習^{ナラ}ふ^ふと^とく^く毎^{マイ}日^{ニチ}か^から^らく^く
ふ^ふ来^キり^りは^は是^{コト}を^をく^くい^いふ^ふの^のふ^ふ押^{オシ}寄^{ヨス}る^る柵^{サク}系^{ケイ}の^の嫡^{チク}子^シ

左^サ衛^{エイ}門^{モン}佐^サ真^{マコト}先^{サキ}か^かけ^けく^く乗^{イリ}入^リく^くま^まバ^バ戸^ト田^タ左^サ門^{モン}氏^{ウヂ}鐵^{テツ}の陣^{ジン}所^{トコロ}よ^よ諸^{シヨ}將^{シャウ}
集^{ツク}り^りく^く軍^{イクサ}評^{ヒヤウ}定^{テイ}め^めく^く対^{タイ}あ^ある^るふ^ふ井^イ樓^{ロウ}より^り鍋^{ナベ}嶋^{ジマ}の軍^{イクサ}兵^{ヘイ}只^タ今^{イマ}城^{シロ}
よ^よ攻^クめ^めと^とゆ^ゆは^はさ^さら^らバ^バと^とく^く諸^{シヨ}將^{シャウ}陣^{ジン}を^をあ^あく^く攻^ク落^{ラク}され^れる^る
其^カ後^ゴ勝^{カチ}重^{ジュウ}今^{イマ}度^{タク}軍^{イクサ}令^{レイ}を^を背^{ソム}き^き城^{シロ}攻^ク有^リ事^{コト}を^を向^ムけ^けふ^ふ勝^{カチ}重^{ジュウ}兼^{ケン}
て^て柵^{サク}原^{ハラ}父^フ子^シ先^{サキ}か^かけ^けし^し乗^{イリ}入^リい^いら^らハ^ハ目^メ附^{ツケ}を^を討^{ウチ}せ^せく^く叶^カふ^ふと^と
不^フ意^イよ^よ攻^ク入^ルい^いと^とゆ^ゆは^は柵^{サク}原^{ハラ}よ^よ向^ムけ^けふ^ふ嫡^{チク}子^シあ^あく^くん^ん若^{ワカ}き^き奴^ヌ軍^{イクサ}令^{レイ}
を^を忘^{ワス}ま^まし^し先^{サキ}か^かけ^ける^るを^を恩^{オン}愛^{アイ}ふ^ふひ^ひら^らく^く子^コを^を眼^{カン}前^{ゼン}よ^よ討^{ウチ}せ^せら^らて^てふ
生^イグ^クひ^ヒなり^り父^フ子^シハ^ハ同^{ドウ}罪^{ザイ}と^と存^{ゾン}づ^づい^いく^く攻^ク入^ルい^いと^とゆ^ゆは^はさ^さま^まこ^こた^たれ^れを^を
鍋^{ナベ}嶋^{ジマ}も^も柵^{サク}原^{ハラ}も^も門^{モン}を^をと^とら^らく^くお^おひ^ひ込^コめ^め三十^{サンジウ}日^{ニチ}を^をく^く御^{オノ}め^めさ^され^れ
け^けり^り勝^{カチ}重^{ジュウ}人^{ヒト}よ^よあ^あら^らく^くふ^ふ筑^{ツク}紫^シあ^あく^く卒^{ソツ}忽^{コツ}の^の城^{シロ}攻^クせ^せ罪^{ザイ}も^も也^ナ
給^{タマ}け^けり^り天^{テン}水^{スイ}さ^さの^のい^いま^まら^らう^うば^ば江^エ戸^ドあ^あく^く城^{シロ}攻^クの^の卒^{ソツ}忽^{コツ}人^{ヒト}よ^よて^て

勝重の通らざるを珍しげに観るるとあり又柳原中守も
ハ若き者どもに竹把の付やう習せせ夜に攻口四五間合ち終
つては皆く〜と云々も勝重は入びりか
攻口を人おこくる事やある一寸も叶ふまじと答へらるる柳原
志ひらまじりバ飛州の士をこが士たよさ〜加へらまじよとい
まじり此時一丈や〜もこが〜バ領地を削らるる議
あり〜も勝重の遠き慮なり〜ある其事や〜人々
いひ〜

○黒田忠之天草丸を攻る時本田但馬きび〜防ぎ支へて先
陣攻入得ざり〜バ忠之直も〜進ま〜るるを黒田
鷗物具時む〜き〜ぬ〜ハヤせ〜大軍を下知〜るる

甲を忌がれば〜後〜と人の嘲ア〜といひ〜
忠之物具と〜肩〜曹をバ〜ぬ〜ひ〜て鉢巻
走り出〜が〜も年比吾家の恩よみ〜奴原〜ハい〜
〜進ま〜るるやこれ此處を〜一足も〜鎗の鐙を地
〜み〜折〜す〜老〜と下知〜るる雨の如く
出〜後炮〜打〜あ〜れ〜り睡鷗ハ是を余所り
見〜ひ〜居〜るバ忠之何〜一方を下知〜るるや年老〜
老耄〜と大音あげ齒〜罵られ〜も少も
騒が〜い〜や〜と〜バ忠之〜怒り罵
ら〜を第市正彼入道ハ物〜わ〜ま〜せ〜れ〜といひ
〜睡鷗つ〜立上り塵を取〜かり〜刻の下より軍

兵一同小どつと進スて天草丸小衆入攻取リり後小忠之賤所
を近付軍兵我下知を用ひビて汝が一言ヲも忽城を攻破シり
しるハいさるるをぞと問フふすべく城攻メ四方より押スせ
先陣セひりと攻ツむる時を見テるる無二無三小進んで負死シ
人を顧ミぶと衆入りリバ攻破スるるをば四方の味方ニいさぐ押
寄セて一方より攻破スらんといさぐだレバ城中も外の防ヲを守リて
先ニきびく攻ムるるをサ支ヘるる外ハ持口モよりと防ガりテ甚
つよク其ハ小一方より攻入リバ容易ク撃破リハ早速
しるるハ却ッて手後ニは常の理ニ少シ臣ノくこの日ニたス人を
ありクとさグまシせシとシて殿トいシてせシらシる味方
よ手負討死多クりキとシてレバ忠之高政ノものに大ニ感シせ

らシるル

○嶋原を攻落シて耐水野義作守勝重ハ江戸ニて賜フる白
川月毛トいフきクまリき馬ノ衆戸田氏鐵の陣所ノりコが
陣所ノ急ニ切ク歸リまシり小勝重の軍兵トも金北東のノ北馬
あリを見るルより我先ニとシてレ勝重馬上ニて曹ヲ
をツて忌武者奉行河村ハ八士大将上田玄蕃小向ハひコが下知
るル以前ノかクるル軍神ノわけク斬棄スと大音あリて
て呼ビるル麾ヲを抜出シ軍兵ヲをメめ堀ヲを破リをメきレは
んで攻入リるル小自分馬より鎗ヲを杖ニめテ本丸ヲを目ノ小ニかけテ
進マるル嫡子伊織ハ十四ニ築シたス先ニかけ知ルを祖父の勝成
後陣ノあり見ル本丸ヲをウち破リて下知シるル本丸ノ小ニてコ

かゝるもの数千人を討とてひ定め防ぎ戦ひしは討
者多し鍋島の軍兵ひるみかくるゝ如く水野父子横す
面もあつて切りて三の丸より本丸へ逃入一揆を討取
敷をもち本丸の石壁より打出鉄炮の玉霰の飛ちるが如し
石壁ハ五間七間斗も高く登り兼く水野父子大音
あびく今日本丸を攻めず八生く難より面を向べき死やくと
あつてふ呼はりて射すもひるまはれ先か攻め
旗奉行神谷玄之丞旗十本の内一本持せ来りて自竿小を
かけ本丸に入んとて繞奉行進藤七兵衛小野田正次夫金の
束の馬印をかりかき来りて松の丸に押立しるバ神谷
も旗を入水野父子の兵念なく石壁を登り本丸攻入るを

勝成二の丸より見やりて今日生の如く出なり美作ハ大
坂ゆく武功あり伊織ハ多ふを始め此軍あつて本丸を攻取
事家の面目なりとよほさるる有り馬左衛門佐康純の
嫡子藏人永純ハ寺澤忠高の後陣なりが唯一人従者も鎧
をもせ寺澤の先陣をかけぬけく天草丸の方へもせ入本丸
小進んで五間斗の石壁を登り今日本丸の一番乗有馬藏人
あつて心ある士ハよく見ゆへと呼ぶ如く勝重ハ士鈴木半之丞
も首を石壁の上より置く息を継居るが此声をやめて鎧を横
へて藏人に向ひ只今こゝより来り一番ハ何事ぞや本丸を水
野美作守攻入旗馬印入置ぬ二番とてなつては是へ上りせりへと
いふ藏人ゆき入らむは唯一鎧もあつてある上水野

の旗本丸は建一をかくはくは義作守ふつてきて八藏人あり
といひまじらば其時鈴木は義作守父子の外大将なり
八いまど本丸は丸をばまざれあき二番までいしてを
石壁よりあぐる永純は丸の丸くひ遠ひの處に進む義作
はいづこふやと向ふ神谷義作は腰郭北上居く爰小旗を入
と答ふ永純聞きては義作守ハ我より後あくるをあれとい
まじら永純本丸は押入しりと勝重は使をきて只今攻入
らまじらよしと有所よりりり夜に入し一揆討く事
もあべい爰一所は有く下知せしはへとたのり藏人
あへば作州ハはまじら後ハ攻入しは藏人ハすも敵近
所を好むは後ハ引れハド一揆打く出ても藏人爰

あへば危きまじらと答へられり勝重より詰の丸より
如く敗北は士三十人計鎗を搦て鉄炮をふよ
並べり藏人ハ鉄の楯を取寄前ハ押立夜の明も待か
けらまじらよし一揆討く如信綱下知して勝重も鎬島の
は入がまじらよし永純ハはりどり使度くふ及てり
まじらり落城の後三月朔日永純勝重の陣所より本丸の一番ハ
藏人よまじらよし勝重年若くて丸の丸本丸の奴原合守を限
防ぎりひりを美作守父子は討破り旗を一番ふ入
事難くあはまじらよしと答ふ鈴木も進みまじら永純
鈴木がやせし言もいりて忘るべき作州父子ハ一番し
藏人二番とやせしと分明ありされども旗入をまじら一
所は

〇一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取ら二の丸
て鉄炮よりのり倒まり老れ首を斬し忠利前髪ある首を
えりおきを鞭やく彼首をさし四郎が首もおびき子推り
見知しつゝ向須佐美権之允四年以前に四郎を召はしひ
事の紛ひ多た四郎なりたの耳に下は痛のん是其の
とく生捕し四郎が母よ見すれば吾子ありとて泣倒し
つば忠利使をききつゝ首を石谷十藏の方子送らまきり後
陣小千石の祿を興へらる

〇鳴石の城攻め細川家の士大将松野亀右衛門井藤より
よ本丸と二の郭此間小坂有く人集る中小大紋の羽織着
る者あり松野指ざし鉄炮あしお打し五町をりきて

〇一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取ら二の丸
て鉄炮よりのり倒まり老れ首を斬し忠利前髪ある首を
えりおきを鞭やく彼首をさし四郎が首もおびき子推り
見知しつゝ向須佐美権之允四年以前に四郎を召はしひ
事の紛ひ多た四郎なりたの耳に下は痛のん是其の
とく生捕し四郎が母よ見すれば吾子ありとて泣倒し
つば忠利使をききつゝ首を石谷十藏の方子送らまきり後
陣小千石の祿を興へらる

〇鳴石の城攻め細川家の士大将松野亀右衛門井藤より
よ本丸と二の郭此間小坂有く人集る中小大紋の羽織着
る者あり松野指ざし鉄炮あしお打し五町をりきて

キと中よあさりくろりそれより空箭なく打らば彼坂
を夫より後より通る者身をかがめ走り通せり。とぞ松
野ハ鉄炮の妙手留刑部一火より学びく妙を得たり

熊本わく一丸の筒をこがた居し小庭の南天蜀れ実をひ
よちの来で食うるをかなりの志もめく菜をこく目的
をんぞと著やく火をけし中らざる事あり係系

の前比事なりしや細川家の長臣南條大膳恨をよくむ
故有く細川家を傾んるを謀りたるよ其比深く密す。

事ありく泄るば細川家の禍ある事を知りて先
切支丹の事訴へり江戸より南條をあす細川家驚き
事よんせん方なり松野我おまうせらまよとて囚人あれバ

厚き板ゆく詰牢をほくり醫者一人小密謀を云ふあり

熊本より物よ小天氣を待てく處る小舟をとらぬ日を

経る内よ人參の入る薬をのこ朝夕の食物まぐ人參

湯少く飲食させり南條ハ氣の鬱し上人参數百

斤飲りし心狂乱しり松野江戸お具し

至りく南條ハ數年狂氣の者よんてく出り切支

丹訟の事を向ふ狂言おなりとく熊本小歸し

とく松野よんこれぬ此謀きと醫一人の知ると云り

元和五年藤堂高虎領國阿濃津ゆく俄に勢揃をせられけ

己人或ハ怪しと或ハ高虎何事よ謀反とまきや万が一も反

心ありハ事を密よまきふりハ人のおろくべしやうふ

なりしハ子細あしんとしつゝ福島左衛門大夫領國を削
らるるなり

○福島左衛門大夫正則ハ関ヶ原の軍功より尾張の清洲より
安藝備後を賜はりたるが物荒く政悪きのまじり多し毎
罪人を殺し且東照宮に對し奉て無禮多しりれば元和
五年台徳院殿御上京の時領國を削らるるなり

本多上野今正純は就く廣嶋の城池を浚ふべき旨を奉り
申上べきよしを答へらるるが御上京の事繁しふたれ
其事なりしに一度嶋の城番請代事を以て召怒らせし
し正純其時召し正則の書翰を以てしつゝ證文の如
し後召ししと聞し召入らるるなり

二條の城ゆく土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎を以て此
事を仰出され議決せり

板倉伊賀守勝重此事ハ井伊掃部頭直孝に仰せられよ
し直孝を召御前より召し福島左衛門大夫國を召放
し召し召し召し召し其事なり誰か使わせんと
しつゝと仰あり直孝京都よりの御使なりバ江戸に殘
りし召し召し召し召し事なり只今江戸に
罷立し者も仰出され然るに又正則を京に召し召し罪の趣仰
かき事し申款あり又ハ國より召し思慮せしめ仰せられ
ても然るべく事しつゝ直孝を召し召し召し召し
和泉守若き掃部頭ハ似合しつゝ但福島も召し召し召し

よく剛カウの者モノ多タければ小路軍コウヂイキありくといふありんとす
直孝チキウ和泉守イヅミノミハ何方イヌカタゆく小路軍コウヂイキをくくすそや直孝チキウが家イハ
ハ武功ブコウの老武者ラウムシ者多タく右ミき戦タケの事コトをすキふ今川氏イマカハノウヂ真マコトの許ヨリ
よて濱松ハニマツ此城主キイハイト井伊隼人イヱハヤトを氏真ウヂマコトの城下ジヤウカへ召メさす誅ツクせしめ
し時トキ小路軍コウヂイキありく殊トの外ソトむらうかりきことハ唯タ一事コトを
すキとすバ和泉守イヅミノミ詞コトなり 台徳院タイトクイン殿ノいられぶる小
路軍コウヂイキの論ロぞとく先退マシイミツさせられ井上主計頭カスヘノを以て再マタび
直孝チキウを召仰メよハこが思オモひとすおも汝ナゲが言コトのどとく人ヒト々皆ナ
口クチふりひく一同イツドウせば掃部カモシが存スる旨ムネみ從シふべしさて誰タレぞ
使シおせんと仰セさうし直孝チキウが後の使シ久世三四郎キウセサウロウ坂部サカベ二十郎ニジュウロウ
兩人ニヒトよかりちんと存スるくとすセバ是コトも符合ノカフせらふといふ仰セす

兩人ニヒト使シさうが酒井雅樂頭サカイタカノ忠世タケヨ太田善大夫オウダタシヨウを近付チカヅケ
福嶋フクシマ左衛門大夫領國サエモンオウコクを召放メシバチさるべきよし仰セ出デされしり
福嶋フクシマハさうものたよりいふある事をう仕シ知チるべきと危アセく思オモふ
ありと語カらさるれば太田オウダタいや何事ニニゴトうつさるべきと事コトもなげ
よひ酒井サカイ又マタいふのこちやある詞コトバを危アセき事コトと思オモふ
とやされさるば太田オウダタなごさる事をす福嶋フクシマハあはれぬす
べきと危アセく思オモふ者モノこそさハれべきと福嶋フクシマハ非道不仁ヒドウフニンの男オトコな
まてん勝負シヨウウスの理リをよくきりくひ男オトコあまバ何事ニニゴトも仕出シさじ
といひが果ハタしく一言イチゴンゆと及イば仰セの音ネを奉ウケまさりき
六月ムネ小福嶋領國コフクシマノウコクを削クらう旨ムネ廣嶋ヒロシマへすえさるば福嶋フクシマ丹波タニハ
諸士シヨシを皆ナ呼集ヨビアツめ預置アツケカカまさる城シロあれば公方クバウに仰セさうとも渡ワタ

一難一又備後守殿為なま^{タメ}バ渡さ^{ワタ}べま^マと評論^{ヒキワロン}上月文右
進出^{スミイデ}く人ハい^イふもま^マ我ハ本丸^{ホマル}を預^{アホカ}りぬ^ニ上ハ命^{イイナ}あ^ハ
ん限^{ホリ}ハ人小渡^{コワタ}さ^マべ^マく^マべ^マと^マ切^キどり^マ丹波^{タニバ}心得^{ココロエ}ざる^{ケレキ}氣色^{キキ}あり^マ村^{ムラ}
上彦^{カミ}右^ミ進^{シノ}聞^ク福^{フク}鳩^ニ上月^{カウキ}兩^リ人^ニの^ノ思^シふ^フあ^ハよ^ヨ同心^{ドウシン}の^ノ面^{オモ}々^ク別^ベつ^ク小^コ判^{ハン}形^{ギョウ}
せ^マく^マよ^ヨと^トく^ク二^ニ通^{ツウ}書^{カキ}く^マ指^{サシ}ぬ^マ酒^{サカ}井^キ主^ニ膳^{ゼン}と^トく^ク丹^{タニ}波^バが^ガ徒^ジ子^シ
あ^ハる^マが^ガ座^ザを^ヲ立^タて^テ鎌^カ田^タ主^ニ殿^{テン}を^ヲ呼^ヨび^マい^ハふ^マお^ホめ^メあ^ハぞ^ゾ丹^{タニ}波^バハ^ハ伯^{ハク}父^フあ^ハれ^レ
ども^{カウ}上月^{ツキ}が^ガり^リあ^ハら^ハ尤^{モトモト}な^ニり^リと^トい^ハバ^バ主^ニ殿^{テン}も^モ上月^{カウ}よ^ヨ同心^{ドウシン}して^{シテ}判^{ハン}形^{ギョウ}
を^ヲい^ハり^リな^ニま^マバ^バ皆^ミ是^シよ^ヨ同心^{ドウシン}して^{シテ}其^カ時^{トキ}上月^{カウ}人^ニく^ク皆^ミかく^クの^ノ如^ニく^ク
な^ニま^マバ^バ丹^{タニ}波^バが^ガ妻^メ子^シを^ヲ本^ホ丸^{マル}小^コ入^ニら^ハる^マべ^マま^マと^トい^ハバ^バ丹^{タニ}波^バ即^ニ妻^メ子^シを^ヲ
本^ホ丸^{マル}へ^ニ入^ルそ^マま^マり^リり^リれ^レ先^{サキ}み^ミと^ト妻^メ子^シを^ヲま^マめ^メり^リ城^{シロ}を^ヲ受^{ウケ}取^{トル}べき^キ
為^{タメ}よ^ヨ諸^{シヨ}將^{ヤウ}も^モち^チ向^{ムカ}ふ^マま^マり^リう^ウば^バ丹^{タニ}波^バ吉^キ村^{ムラ}又^{マタ}右^ミ進^{シノ}水^{ミヅ}野^ノ治^チ即^ニ右^ミ進^{シノ}

二人^ニを^ヲ使^シと^トく^ク左^サ進^{シノ}大夫^{ダイフ}領^{レウ}國^{コク}召^メ放^{ハチ}と^トま^マり^リ仰^{オホ}の^ノ旨^メハ
謹^{クニ}で^デ乘^ノり^リの^ノ然^ニま^マり^リども^モ主^{シユ}君^{クニ}預^{アホ}置^{カカ}ま^マり^リ城^{シロ}を^ヲ證^{シヨ}據^{ウコ}と^トす^スべき^キ書^{シヨ}
簡^{カン}た^タく^クく^ク渡^{ワタ}さん^{サン}事^ジハ^ハ人^ニの^ノ存^ゾる^マま^マ思^{オモ}ひ^ヒや^ヤま^マり^リ次^ジよ^ヨ領^{レウ}國^{コク}
り^リ入^ニ給^{タマ}ひ^ヒん^ン事^ジあ^ハら^ハれ^レ若^{ワカ}た^タ奴^{ヤツ}原^{ハラ}無^ム礼^{レイ}の^ノ恐^{オツ}ま^マり^リ領^{レウ}國^{コク}を^ヲさ^サけ^ケら
ま^マり^リへ^ニと^ト送^{オク}る^マま^マり^リバ^バ左^サ衛^ヱ門^{メン}大^{ダイ}夫^フハ^ハ程^{ホド}遠^{トホ}一^{ヒト}伏^{フシ}見^ミよ^ヨあ^ハる^マ備^ビ後^ゴち^チ
の^ノ書^{シヨ}簡^{カン}を^ヲ證^{シヨ}據^{ウコ}よ^ヨせん^ンや^ヤと^ト云^{イハ}せ^セら^ラる^マふ^フ父^フ子^シと^トま^マり^リ事^ジハ^ハ論^{ロン}な^ニり^リと
り^リども^モ備^ビ後^ゴ守^シが^ガ領^{レウ}國^{コク}あ^ハる^マ城^{シロ}も^モあ^ハる^マ備^ビ後^ゴ守^シが^ガ言^{コト}ハ^ハ用^{ヨウ}あ^ハら^ハ
ま^マり^リど^ドい^イふ^マま^マり^リ正^{セイ}則^{ソク}が^ガ書^{シヨ}簡^{カン}来^{ライ}り^リま^マり^リは^ハ城^{シロ}門^{モン}の^ノ大^{ダイ}多^タあ^ハて^テ書^{シヨ}
簡^{カン}を^ヲ受^{ウケ}取^{トル}ぬ^ニま^マり^リて^テ廣^{ヒロ}鳩^ニハ^ハ船^{フネ}入^ニ二^ニ所^{トコロ}あ^ハり^リ人^{ヒト}多^タく^クあ^ハら^ハる^マり^リと^トく^ク
士^シども^モの^ノ妻^メ子^シ退^{タイ}去^サる^マ時^{トキ}争^{アラ}あ^ハる^マや^ヤの^ノ恐^{オツ}ま^マり^リも^モり^リと^トく^ク一^{ヒト}方^{ハウ}を^ヲハ^ハ人^ニを^ヲ
と^トく^クめ^メ一^{ヒト}方^{ハウ}の^ノ口^{クチ}よ^ヨり^リ退^{タイ}散^{サン}ま^マり^リ城^{シロ}中^{チュウ}の^ノ士^シハ^ハ門^{モン}北^{キタ}左^サよ^ヨ付^{ツキ}礼^{レイ}服^{フク}して^{シテ}並^{ナラ}

入ラまシてクり
び居城受取の使安藤對馬守重信ハ城門の右よりひいて城シロは

安藤城門は入時並び居キり人々向ひた處ドノコトの事ヤベ
さやうもたのりと初ハジメをかけらる其時皆礼せし獨ヒトリ茶筌チヤセン髪
よく志シみの種木杖シモキウジをつまき對馬守の詞コトバをやかみか
を見く礼レイしと山崎甲斐守見ミくたみかくあぬ人
たうりと知チく姓名セイメイを問トふ長尾出羽と答コタふ山崎退散の後
家族カザクをさヤシふ又他國マコクは仍イカケ寓居クウキヨせし事コトよとて使ツカ
をめぐく云イせしれしよ出羽甲州の御事ミゴトハ兼り及びトり泰チ
ま旨チを謝シヤるやぐ森義作モリタカサキ忠政チウテイ礼レイを厚アツく招マネふじ
うウバ森家モリケ仕シへくシとたのり

丹波タニバと文右フミサダとハ密ヒソカに相討アヒり初ハジメよりきこるべしと
いひく同心ドウシンする人ヒトをたの時ハ別ワカはさシき道ミチをたぬ事コトを二
みく士シの心を試コシしなるなりと其比ココロいひあへりシ後
城シロをシふ決ケツせし時丹波上月タニバカウキは向カひ吾ウレと文右フミサダ腹切ハラキり
ハ何事ナニゴトも外ホカはすシべき事コトなりといひシとや

左衛門大夫罪ツミせしとシ暇イダヒを乞コヒふる士シ三十人サウジウジンをり
ありしは狭間サマくシといひれり妻子ウジメを本丸ホンマルへ入レるハ
諸モロぶりと名付妻子ナツケウジメを城外キヤウガイはゆシ其身ミミの城シロをシらん
といひハ片カタ護ゴりといふ後小京都耳塚キヤウトミヅカは札ワカを立タテ二色ニシロは
ハカちく姓名セイメイをカキし世の人ヨと見ミせしゆシさぬシり
面々オモハ餓死ガシ及ツびぬといへり上月カウツキハ禄ロク五千石イハヒ士大夫シタフ将シヤウり

正則上月が志を感賞し書簡をあつへらる今度我ホ事
法部よぬ是は依る城を扱と存ゆよー心底あふん然
ども存寄みきりゆる早く城相渡しつゆい後志も
不浅るふも存ゆとぞ書きくる大崎玄蕃長行も福
島家の士大將なり同一時大崎ハ備後鞆の城より秋田
下総も同く鞆有しが大崎を廣嶋よりやりて比一人よて
鞆をもち討死して名を揚ばやとや思ひらん大崎よ向ひ
江戸より城を受取べき使近き内よ暑陣有べいとく廣
嶋よこのめれ然るべくと云大崎ゆく殿の下知あく
て城を出んこと思ひもよふ秋田城中をとり防
戦の支度きなりふ大崎ハ柱より眠る外なり

人々大崎をききしつゆい大崎あがき秋田ハかくゆじく
防戦の用意ききしつゆい大崎ハ柱より眠る外なり
事ひまわりとつゆい其子細を問ふ大崎此城をもち日本
國を敵めあり方よ一も儲べきやあつらんを徒に殺さへも
いふなりつゆい一人大崎此門外へ出く城代大崎玄蕃と申
者ありとく腹切人後城を受取り城の人々おらば寺すけ
らまよと云く各々その命よ換ふべし何れ用意の有へたと
いふなりかつゆい正則の證書来り事故たたく城を渡せし
うげ大崎と村上彦右衛門真鍋五郎右衛門と同一く紀伊の家
よ仕へたり大崎ハ若き村木村常陸少師春よ奉公し後正則ふ
仕ふ鬼玄蕃といふまじつゆいそのたより関ヶ原此時尾州清洲の城

小大崎をさすまじり石田三成大垣の城に入し使を以て福嶋
家ハ大崎の恩篤た入たのまじり今度無二の味方よん清洲を明
らまじり兵六を入るんとぞまじり津田備中繁元ハげ
めもとちりひく同心すまじり長行事ハいふもせよ殿の仰
あくく他國の兵を城小いまん事存もよりぬいれ志ひく共
を寄らまじり一軍せんと目を見知く使を罵り追せり
かくく大崎門を固くまじりまじりかくく小山
告しり一ハ正則悦ぶ東照宮正則清洲の守り小難有
と仰あり正則大崎の玄蕃を留まじりんと申すよ斯と告来り
々まじりババと召大崎ハ世よまじりまじりまじり
仰らまじり其後も清洲を敵小くればり一ハ大崎ハ功あり

と度之仰りりりり紀列もく安藤帶刀大崎村上ハ
よまじり武功を向まじり一ハ真鍋ハ十四の時より軍を
度の功名をかまじり村上も十四竹子此軍より壬生川の先
名をいひ一ハ大崎ハ日まき木村が許し小祿まじりまじり士大將
よなり又福嶋の家あくも士を下知しハバ左のまじり
りいれといハ帶刀大まきまじりりりりり又一説ハ福嶋正則流
罪藝州へまじりまじりハ長臣の老ども福嶋丹波まじり小相
集り城を渡まじりまじり否やを論じ村上彦右衛門通清殿流
罪まじりりりり御存生よおいてハ御判形をまじり國を引渡
御判形来らば此城を枕まじり討死の外他事な一但本
丸ハ上月文右衛門預りまじりハ上月小談合然るべりといハ上月聞

て御判形を見せしむ。いづれの本丸を渡すべきといふ備後三
次小尾関石見備中境東條は長尾隼人一勝備後三原は太清玄
蕃長行有りしと石見隼人をつかませ廣島三原の兩城を守り
各人質を城に入天守は燒草を積大手搦手に持口を定め
しう安藤對馬守永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ備中
の笠岡は著陣あり丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使し
主君の判形を見せしむ城を渡さるる迷惑なりし竹中末次
へいひ送まらう上使少く状を取寄べいと云ふて笠岡は
滞留の不正則の状を來り丹波已下是を見ん城を渡さる
と相定む笠岡より尾道へ八里初八陸路と定めしを安藤
船小く行ぬしと云う加藤嘉明聞くと上使八船小く早く惣人

數陸中く違はらん上使より遅くバコまらハ男をすてん
是非陸をとすめらるるも安藤聞入ら船の事を蜂須賀
阿波守より相討らる加藤も船を用意ししとせ先て某の船不
乗らるるとすめ此船に乗る上使尾道に到り人数八陸を廻
りたり大崎玄蕃使を以て主君の状廣島に來る上三原も相
違はらる然れども三原へ狀來らば城ハ明渡一郭一と竹
中へのと云送る安藤聞くと跡先の思慮も及ば無二無三
城へ入上使討死の時爰より城北門際より上使討死せハ續
く其なりきといふる有べし只今まぐ笠岡は滞留し又爰は
日數を送るべきありと云切しと云ふ加藤允然と云ふ
子息式部少輔の先陣をとや押出さんとすするや三原の城

へとや正則の状来りなまばゲンバ玄蕃事故あく城を渡り
城に入るとんば士足輕の名を書付くさカキツケまどく小配コヘアを城の
隅々まどく掃除し座敷イハ火釜ヒカマ湯を沸し茶をいせチヤを
アヨクジ翌日廣嶋ヒロシマ著々まば丹波今日波タニハはべきよ城中掃除未
終らば下ゲの荷物ものけ兼カネしり明日まどくまアシタしりやと
いよ永井ナガイぞく我がゆきつユキツまゆ有城和平シロワヘよなり渡り
及エ下人の荷物を片付兼カタツケカネしり一兩日まどくまヒトニしりしり
物ハ札フダを付く大手オウテ揃カマテ其まゆりゆきまどくサマべー相當サマあま
よ買取カヒんとく城を受取ウケしり其翌日寄手ヨセテの大將トシ頓死トシぬ
城中シロウチのいひまゆまば城シロを持モ之ノ變シも計ハりケるル危ヤき事コト
あまゆモツク云傳モツクへしり唯タラシ一刺ヒコも早く受えんとく大手へ進シり

繪圖エを披ヒき城内シロの物主モノヌシどもと呼集ヨボめ番所バン寄口ヨセを渡り
湫城スミへ入ツく飛脚ヒキヤクをもりル此音言上コトネいりルまゆり古き人
の詞コトよ城シロに受取渡ウケトリワタシハ互タガヒよ證據シヤクコをシり唯タラシ今イマ事コトは臨シむが如
く心得ココロべー城主シロヌシ進退窮シノビりルまゆまば偵シむルまゆルまゆルまゆル

